

---

# 口から虚を吐く

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

口から虚を吐く

### 【Nコード】

N4390N

### 【作者名】

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

### 【あらすじ】

皆さんは嘘を吐きますか？ 私は吐きます。

この作品はフィクションです。

実際の女子高生や本屋の店主とは一切関係ありません。

もう夏も終わりが近いある日。田舎らしく蝉だけでは終わらない虫のコーラスを聴きながら、小野はドシドシと音を立て、なじみの本屋の敷居を跨いだ。

「頼もう！」

「道場破りか、お前は」

時代がかつた挨拶に、店長は持っていた携帯ゲームから視線を切って小野に目を向ける。

まだ夏休みだと言うのに、登校日なのか夏服のセーラーを着た小野は、無言でカウンターを挿んで店主の対面に座る。その動作には、一々怒気のようなモノが隠れて見えた。

「聞いてよ！ 店長！」

「聞くさ、聴くよ？ 俺が話を聴かなかったことがあるか？」

いかにもいい加減に店長がゲームをしながら相槌を打つ。

「ただ、嵐のハッサム対策に、めざパ炎テクニシャンハッサムつくってるから、その辺は考慮してくれよ？ この四日厳選でちよつと苛立ってるから」

全体必要性がわからないモンスターを作る店主の手から、ゲーム機を小野が奪い取る。

もしかしたら、目指している威力60を持った者が産まれて来るともしれない卵を貰った瞬間だったので、店主は慌てて立ち上がり、急いでゲーム機を取り返す。

どうせ、産まれないことはわかっているのだけでも。

「違う違う違う！ 私の話を聞け！」

「はいはい。聞かよ。聞いて差し上げますよ」

ゲーム機をスリープモードにして、店主は大仰に頷く。

「よろしい」

手を腰に当てて、ない胸を張って小野が不遜に頷く。

そして、怒りのままに吐き捨てる。

「平気で人を騙す人をさ、店長は赦せる？」

「ああ、うん。嘘くらいなら俺は平気だぜ？」

「でしょ、許せないでしょ……って、あれ？ 赦せちゃうの？」

あっけからんと言いつ切る店主に、小野は怒りも忘れて目を丸くする。絶対自己中心的な店主が、まさか自分を騙す行為を赦すとは夢にも思っていなかったらしい。

「当然だろうが。利害関係があるならば、もっとわかりやすく言えば、目の前に立ちただかるなら、それはもう戦いだ。自分の為に正しくあるうとする行為から生まれる嘘ならば、それはもう善悪の彼岸だ。良い悪いなんてどうでもいい」

「じゃあ、嘘をつかれても全然気にしないの？」

「まずよ、相手の発言の意味を考えろ。嘘って言うのは、『ない』ことを言っているんだから、嘘なんてこの世にはないんだよ」

ゲーム機をちらちらと見ながら、店主は下の小さな冷蔵庫から缶コーヒーを二本取り出す。真つ黒な缶を小野に投げ渡して、ゆっく

りと会話を続けた。

「この世にないことを言っているんだから、絶対に矛盾があるはずだろ？」

「そりゃあ、そうだけど」

「だったら、見抜けないわけがない。と、すると、相手も嘘を見抜かれるリスクを負っていることになる。騙されるリスクと、嘘がばれるリスク。これは中々厳しい勝負だ。嘘を見抜かれるって言うのは、自分の語りたくないことを逆に語っているようなものだからな」

確かに、店主の言うことは筋が通っているように小野は感じた。

嘘は、どこまでも虚構だ。事実を混ぜていたとしても、絶対におかしな点がなくては、おかしい。矛盾が生じない嘘は、もうすでに真実だ。

そして嘘をつくのは、真実を伝えないためであるのもまた真実だろう。言いたくないことを、言わない技術が嘘なのだ。その嘘が一度ばれてしまったら、大切な知られたくない真実を丸裸にされたも同然ではないだろうか。

「つまり、嘘をつくって言うのは単なる外交テクさ」

「じゃあ、店長は嘘吐くの？」

「俺はそう言った嘘は吐かないね」

「何で？」

「だから言ってるだろ？ 嘘を吐くって言うのは弱みを見せるのと同義なんだ。相手とのやり取りにおいて、一切の嘘をつかない『公正さ』は自らの強さを誇示する、最高の舞台なんだよ。だから、公正さは好まれる。もっとも、いまじゃあ、その意味も分からずに『公正さ』だけを求めている奴が殆どだけだな」

いつも通りの饒舌な店主の顔を軽く眺めて、小野はため息をつく。

「でもさ、騙すってそう言うことばっかじゃないじゃん。利益とか何もなしに嘘吐く人はいるよ?」

呼吸をするように、嘘を吐く人間はいくらでもいる。

前述したような、取引や戦いなどではなく、平然となんでもない事で嘘をつく人種。

「例えばさ、何処何処に行ったことある? って聞いたときに行ったこともないのに、『あるよ』って答える人」

「いるな、いるよ。知らないことを言えない人間。故に嘘を吐く。これは辛いよな。自分自身を騙す必要がある点に置いて最悪だ」

「うん。ずっと自分を吐いちゃった嘘の『設定』に当てはめないといけないもんね」

「時間が経てば経つほど、嘘だったなんて言えなくなる。しかも、嘘を真実とするために、また嘘を吐く必要がでてくる。悲しい悲しいマッチポンプだ」

「こつ言う人達はどうして嘘をつくのかな?」

なんとなく店主の答えがわかっていた小野は、店主の口が開くと同時に、店主が答えるであろう答えを呟いた。

「虚栄心だな」「虚栄心でしょ?」

読みは、見事に的中した。

店主は明らかに冷めた感じの表情で小野を見つめ、対照的に小野はにやにやと店主を窺う。

「その通りさ、小野。自分をもっとすぐ見せたいって言う、下らない背伸びさ。どれだけ背伸びをしても、自分の身長を超えること

なんて出来るはずがないのにな」

「そりゃそうだよな」

「大体、経験していればそれだけで素晴らしい、優位だって言う風潮が俺には理解できん。経験したからって、それが生きる程器用な人間は少ないだろ」

情報過多の世界だからこそ、情報を制するものが世界を制する。それは確かだろうが、制すると言うことは、別に多くを知っているとか、多くを持っているとかそういうことではない。

「嘘を吐いて、自分を大きく見せても、それこそ虚ろを体現しただけの栄光じゃあないか。そんな嘘、俺は吐きたくないね」

「なるなる。じゃあさ、まったくそういうのじゃあない嘘は？」

「って言うと、冗句みたいな冗談のような、本当に無意味としか思えない嘘か」

「そうそう。『トンボは太陽の光で上下を判断するから、光を下から当てれば重力を無関係にそっちを上だと思ひ込む』とかね」

小野の妙に棘がある台詞に、コーヒーの缶を軽々と片手で潰して店主が鼻で笑う。

先日、店にトンボが入って来た時に店主が小野に教えた雑学であった。

「おいおい。何言ってるんだよ。それはマジだ」

「そう言うから、学校で話したらメガネに『それは物理的にありえないよ』って超馬鹿にされたんだから！」

怒っていた理由はそれか。ついでに、やはりとんぼ返りは必須かな？ とどうでもいいことも思った。

そもそも、メガネとは誰だ。名前だけでメガネをかけていること

だけはわかったが。

「物理的って、たかだか高校生が偉そうな言葉を使うな。まるで専門家みたいだ」

「専門家なのは知らないけど、頭が良くて嫌味っぽい奴なのよ」  
「ああ、まさしくさつき言った通りだ。経験はアドバンテージじゃあないことの証明みたいな奴だな。頭が良いってことは、それなりに知る喜びを持った人間だろうに、もうそれを放棄してやがる。知らないから学び続けていた筈なのに、知らない情報を嘘だと切り捨てちまうなんて、もう知識に操られている悲しき男だ、メガネ君」

つらつらと、朗読するように語る店主に、小野が表情を驚かせる。

「って、トンボの話はほんとなの？」

「本当さ。昔、一って言う親戚みたいな奴と一緒に実験したからな。でっかいクリアケース用意して、暗室に置くんだよ。で、下から光を当てると、見事に重力を無視して飛ぶんだ」

どんな暇人だ。

「結局、物理って言うのはただの言葉であって、法則って言うのはただのこじつけに過ぎない。そんなことは知っても知らなくても、事実には関係ないのさ」

「あー！ マジ？ なんかクラス全員に笑われたのに！」

「小野。俺とお前の仲じゃあねーか。クラスの秀才君と俺だったら、比べるに値しないだろうが」

「でも、店長結構適当なことも言うし、めざパテクニシャンハツサムとかかなり狭いことするし、それに引き替え、メガネの野郎はテスト前とか人気者だし、授業で間違えたこともないし」



「そう、それさ」

「それ？」

「嘘を吐くことが善いとされない理由」

コーヒーの缶を机の上で転がしながら、店主は二つ目の理由を口にする。

「騙されることなんて、それほど悲しいことじゃあないんだ。が、もうその人を信じられないと言う事実は、胸が苦しくなるほど辛いんだよ」

(後書き)

リクエスト小説も幾つ目でしょうか？

まだまだテーマを募集しています。

感想や、その他の作品も是非。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4390n/>

---

口から虚を吐く

2010年10月11日10時20分発行